

陳舜臣さんを語る会通信

NO.29 Mar. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年3月1日

神戸華僑歴史博物館「陳舜臣没後6年桃源忌特別展」開催(続)

本号では、次のパネル4枚を取りあげました。

■ 中国大陆における陳舜臣の足跡

■ 陳舜臣没後6年桃源忌特別展

No.4 作品に描かれた「海岸村」

No.5 陳さんは再度山に1029回登った!

No.6 家業に取り組みながら「できれば学問の周辺にいたい」と願った10年

(編集委員 橘雄三)

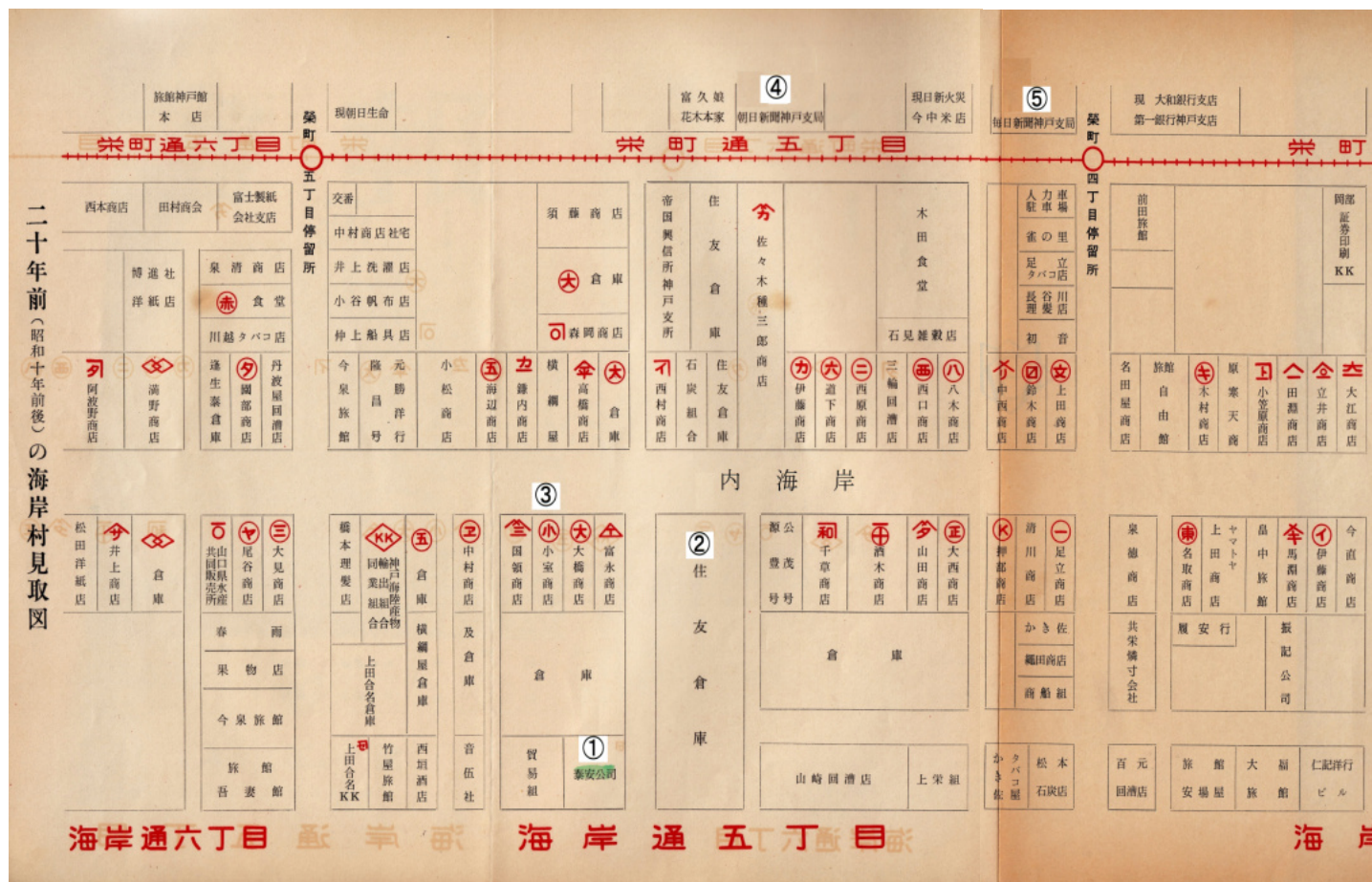


写真の中にお知り合いが見つかったようで、お二人の会話が弾んでいました。

展示風景

陳舜臣没後6年桃源忌特別展 No.4 作品に描かれた「海岸村」

「海岸本通りと栄町の電車道のちょうど中間に、一筋の狭からぬ道路がある。これが『内海岸』なのだ。道の両がわには、輸出用海陸産物の問屋がずらりとならんでいる。土地の住民はここを『海岸村』と呼ぶ」（『三色の家』）。「海岸村」には潮の香を思わせる乾物のにおいがつねにたちこめていた。



上図は『神戸海栄会会報 第3号』（1956年）「昭和十年前後の海岸村見取図」の部分。番号①～⑤は加筆

《 1. 『道半ば』の記述から 》

陳舜臣さんの父・陳通氏が経営する貿易会社の社名が「泰安公司」であることは、

「父の経営する「泰安公司」は、…」

という記述からわかります。「泰安公司」①は『三色の家』のモデルとしてよく知られています。下記は、付近の状況です。

「海岸通五丁目の我が家は、本通りに面していた。（中略）我が家は五丁目のちょうど中ほどにあり、住友倉庫②の西隣というのが、最もわかりやすい。借家を転々としていた我が家も、私が小学校四年のときにここにやり、空襲で焼かれるまでの十年あまりのあいだ、ほぼ落ち着いたといえる。（中略）」

小室君の家③は海岸通で、我が家とは背中合わせになっていたわけだ。」

小室君は陳舜臣さんの小学校の同級生です。「泰安公司」があったところは、国道2号の拡幅で道路敷になってしまい、今はありません。

《 2. 『残系の曲』の記述から 》

主人公関修平は小学校卒業とともに生活の環境ががらりと変わります。新しい住まいとなった新福隆公司の場所、間取りなどは、「泰安公司」がモデルになっています。

「修平はこのあいだから栄町の市電通の山側をぶらぶらと歩くことをおぼえた。五丁目の東角が毎日新聞神戸支局⑤で、表にその日の新聞を貼りつけている。修平はそれを丹念に読む。（中略）そこがすむともうすこし西へ行く。五丁目山側の中ほどに、朝日新聞神戸支局④があり…」



昭和10年頃の海岸通遠景
泰安公司は白矢印（加筆）の
辺りに十年間存在した。
（原画像は神戸市文書館蔵）

ふたたびさん

陳舜臣没後6年桃源忌特別展No.5 陳さんは再度山に1029回登った！

このとき、陳さんは12歳です。集合写真の前列に坐っているかもしれません。また、「登山会」創立者の一人、父・陳通氏はどこでしょう？



武夷登山会 創立一周年記念大会
(一九三六年 於再度山天狗屋茶店前)

《 1. 「神戸武夷登山会」のこと 》

「福建出身の華僑は多い。二世、三世も、親たちから武夷の名勝をきかされている。六甲山系の山を背にした神戸でも、戦前、華僑が登山会をつくったとき、それに「武夷登山会」という名をつけた。私の父もその会長をしたことがあるが、武夷は福建出身の人にとっては、あこがれの山だったのである。」(『茶事遍路』より)

陳家にとって、台湾移住前の居住地が「福建省泉州府同安県」であったことは、自明、承知のことでした。(『道半ば』p.48-49)

ところで、神戸武夷登山会の会員資格ですが、同会の『満60周年記念会報』(1999年発行)掲載の会則では、「年齢、国籍及び性別は問わず」となっています。

同会は、民国二十四(1935)年四月創立で、陳舜臣さんの父・陳通氏も創立者の一人です。

会則の条文をいくつかあげます。

第二条 本会の署名所は再度山『稻荷茶屋』『灯籠茶屋』に置く。

第六条 会員の義務

1. 会員は毎日一回登山し所定の備付けの署名簿に署名をする。但し代筆は無効。

《 2. 陳舜臣さんの再度山登山 》

上述記念会報に、陳舜臣さんについて興味深い記載があります。

会 員 登 山 記 録

(1936年4月1日～1999年3月31日)

会員番号	氏 名	継続年数	60年度登山回数 (98.4.1-99.3.31)	本年度末累計回数 (入会-99.3.31迄)
1253		7	31	1,038
341	陳 舜 臣	49	0	1,029
1109		15	3	1,023

神戸武夷登山会の記録では、陳さんの生涯、再度山登山回数は、1029回です。

また、陳舜臣さんの再度山登山について、『燃える水柱』に、こんな記述があります。

「そのころ、私はたいてい毎日、一時間ほど山歩きするのを日課としていた。(中略)

いつものように茶店で紅茶を飲み、七言絶句を五首読んで、それから帰ることにした。」

『街道をゆく 閩のみち』に、司馬遼太郎さんが、同行者、陳舜臣さんの即興の漢詩に助けられる場面がありますが、陳さんには漢詩の素養があり、また、漢詩は身近なものだったのです。



陳舜臣没後6年桃源忌特別展 No.6

家業に取り組みながら「できれば学問の周辺にいたい」と願った10年

日本の敗戦によって、陳舜臣さんは、日本国籍から中国（中華民国）籍になりました。このことは、陳舜臣さんの人生設計に決定的な影響をあたえました。

「否応なく国籍を変更されたので、これまで自分に予定されていたコースが取りにくくなったのである。大阪外語は国立だから、その教授、助教授は国家公務員という一面がある。「任官」しなければならないのだ」（『道半ば』p. 146）。

「台湾からやって来た何既明氏とは、これまでなんども自分たちのアイデンティティについて語り合った。だが、私はほとんど台湾のことも中国のことも知らないのである。なによりもまず台湾に帰ってみることではないか」（『日本経済新聞』2004年6月連載「私の履歴書⑭」）。

陳さんの戦後は、台湾帰国で始まります。

《 1. 終戦から乱歩賞受賞まで 》

「年」の欄、灰色地は貿易会社勤めの10年	
年	できごと
1945	8月 終戦
1946	3月初旬 台湾・基隆上陸
	この間、台北県立新莊初級中学で英語を教える。1947年 二・二八事件起きる
1949	10月 日本に帰る
1950	3月 結婚。家業（貿易商「泰安公司」）に取り組むようになる
	父親の会社（泰安公司）での仕事はもっぱら商用文を漢文で書くことで、いわゆる営業ではなかった
1952	5月 長男（立人）誕生
1956	商用文作成にタイプライターが導入され、手書きによる漢文仕様が半分量になったため、自分の次の仕事を考えなければならなくなる
1957	1月 長女（由果）誕生
	生まれて間もない長女が風邪をひき、眠気覚ましに捕物帖や探偵小説を読みながら、徹夜で看病をしていた時のことです。「これなら、おれのほうがうまく書けそうだ」「私は娘の顔をみながら、そう呟いた」「私が本気で小説を書いてみようと思ったのは、このころからであった」。少しずつ小説を書き始める
1958-59	将来への不安はあるが、作家を職業とする決意を固める
1960	10月 「風のなか」が第十一回文学界新人賞の最終審査候補作になる
1961	8月 「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞受賞。予想以上に多くの原稿依頼が舞い込むようになる

《 2. 「学問の周辺にいたい」と願って 》

陳舜臣さんは1950年、結婚し、家業に取り組むようになります。

「家業であったが、私ははじめからこれは自分にむかない仕事だと思っていた。（中略）正直いって、あまり熱心に働いたとはいえない。デスクワークがおもであり、なるべく早く仕事をすませて家に帰った。」（前掲「私の履歴書⑭」）

「サラリーマンというべきか、ビジネスマンというべきか、台湾から戻った後の十年は、本来自分がめざした道ではなかった。（中略）『せめてペン・マンとしての道を歩みたい』」

（『道半ば』P. 311）

「家業に従事した十年は、私にとっては作家になる準備期間だったと言える。私は子供のころから、よくぼんやりしているとまわりの人から言われた。じつはそんなとき、私は『物語』を考えていたのである。子供のときはもちろん他愛のない『物語』を、作家をめざしているときは、多くの人を納得させる『物語』をかかんがえている。」

（『道半ば』P. 319）

最後は肯定的に捉えてはいますが、本気で家業に打ち込めない、不本意・将来への不安を抱えての10年であつたことがうかがえます。

乱歩賞を受賞し、多くの原稿依頼が舞い込むようになった頃の舜臣さん。

『宝石』1963年9月号より。

